❶❶❼×madame FIGARO japon

『007/スカイフォール』トークショー付き上映

トークゲストは英国の文化や 007 シリーズに明るい研究者、著作家の中野香織氏。『007/スカイフォール』上映前のトークとして、007 のデザイン、スタイル、衣装、などシリーズの要素を熱く語られました。聞き手は雑誌 FIGARO 編集者で、ご自身も 007 ラヴァーである金井洋介氏。
盛況に終わったトークショーのダイジェストをご紹介いたします。

◆◇

◇金井洋介氏（以下 金井：敬称略）：
まず、中野香織さんの経歴を簡単に紹介させていただきます。東京大学博士課程を経て、イギリス文化研究を皮切りに、ダンディズム史、ファッション史、モード史、そしてラグジュアリーといった領域の研究に従事され、ケンブリッジ大学客員研究員、東京大学教養学部非常勤講師、明治大学国際日本学部特任教授を経て、2018 年に株式会社 Kaori Nakano を設立、現在は日経新聞をはじめとした連載や企業のアドバイザーを務めるなど、日本のファッション研究やジャーナリズムを牽引する存在として多岐にわたって活動されています。

早速ですが、今回の『スカイフォール』は 2012 年公開ということで、もうすでに 11 年も経っているんですね。

◆中野香織氏（以下 中野：敬称略）：
ついこの間のように感じますが、もう 11 年なんですね。

◇金井：
11 年前、僕はまだ学生だったので、それこそ多分ピカデリーさんか新宿のどこかの劇場に、スーツにネクタイを締めて観に行った記憶があります。中野さんはどこでご覧になったか覚えてらっしゃいますか？

◆中野：
私はイギリス関係の方が集まる試写で観ました。シャンパンを飲みながらロンドンを語るというような、そんなイベントだったと思います。

◇金井：
前回『ロシアより愛をこめて』のトークショーでは、歴代ボンドのファッションだったり、"ラグジュアリー"について

深掘りしてお話を伺いましたが、今回は"ダンディズム"に焦点を当ててお話を伺いたいと思います。中野さんは 2009 年に「ダンディズムの系譜―男が憧れた男たち―」という本を書かれてますね。そもそも"ダンディ"ってどういう意味なんでしょうか？

◆中野：
皆さん、"ダンディ"っていうと、どんな方を思い浮かべますか？日本ではスーツをビシッとかっこよく着た、中年以降の男性という、ちょっと良いイメージがあると思うんです。けれども、本家のイギリスで"ダンディ"というのは、あまりいい言葉として使われません。洒落者を意味することはまちがいないんですが、むしろちょっと揶揄的に、からかうように使われるんですね。表層しか関心がない、ちょっと軽い男みたいな感じで"ダンディ（↑）"と語尾を上げて発音されたりして、褒め言葉としては使いません。ちょっとこれは要注意ですね。

◇金井：
イギリスとかに出かけた時に、ネクタイを締めてビシッとした紳士を見かけたら、つい「ダンディですね」って言いたくなっちゃいますね。

◆中野：
それは NG ですね。「Well dressed」、素敵な装いですねとか、そんな言い方はいいんですけれども「ダンディですね」は日本だけにしておいた方がいいと思います。

◇金井：
そもそも"ダンディ"は、何から始まったのか、誰から始まったものなんでしょうか？

◆中野：
19 世紀のイギリスにボー・ブランメル（ジョージ・ブライアン・ブランメル、Beau Brummell＝伊達男ブランメル）という人がいました。今も、ジャーミン・ストリートに行くとボー・ブランメルの像、ダンディの像が建ってるんですけれども、その人が元祖です。社会的地位は限りなく平民に近い貴族だったのですが、表層の力だけで当時の国王よりも強い影響力を持ちました。彼は「主流の価値観に対して抵抗し続けた人」ですね。主流の拝金趣味とか、真面目であることがいいとか、そういう価値観に対して、徹底的に逆張りの価値観、表層の軽さで抵抗する、個人の美意識で優位に立つ、それが"ダンディ"の本質ですね。だから、ダンディにとって、そうやってからかわれたり、否定されたりすることは、かえっていいんですよ。名誉なんですよ。

◇金井：
「アンチ主流派」、みたいな。

◆中野：
そう、アンチ主流、抵抗、個人の主体性を貫き通す、というのがダンディズムの本質ですね。

◇**金井：**
では、なぜ日本でいい意味として使われるようになったんでしょうか？

◆**中野：**
ボー・ブランメルは、徹底的に表層の着こなしにこだわることで、主流のジェントルマンたちに対して、階級を超えて個人として影響力をもち、優位に立ったんですね。ブランメル亡き後、その在り方は、イギリスよりもむしろフランスに影響を与えます。フランスのボードレールという詩人や、バルベー・ドールヴィイという文学者などがブランメルを讃え始めるんです。やっぱり遠くにいるから、良く見えるんですね。貴族がいなくなったフランスで、そういう表層にこだわる在り方は、ちょっとかっこいいじゃないか、貴族的じゃないかっていうので、ダンディズムを美しい言葉で褒めるわけですよ。「ダンディズムとは憂愁に満ちた落日の最後の輝きである」みたいな、そういう言葉でボードレールが褒めちぎるんです。そのボードレールに心酔したのが永井荷風などの日本の文学者たちですね。そういう人たちがフランス経由で日本にダンディズムを持ってきて、唯美主義的な、深い思想を含んだあり方として広めるんです。つまり、本家イギリスでは軽んじられていたものが、ちょっと距離を置いたフランスで文学者たちに称えられ、それに影響された日本の文学者たちによって、ダンディとは渋くてカッコいいものとして広まってしまったという次第なんですよ。

◇**金井：**
「アンチ主流」という元々の意味では、まさに 007 の原作者のイアン・フレミングは、ダンディズムを体現している作家なんじゃないかと思うのですが。

◆**中野：**
まさしくです。

◇**金井：**
1960 年代は、"ダンディ"という言葉が生まれてだいぶ時代が経っているんですが、その頃のダンディズムというのはどういう状況だったんでしょうか？

◆**中野：**
ダンディズムという言葉自体、その頃に使われていたかどうかも怪しいんですが・・・。当時のイギリスの文壇は、キッチン・シンク派、 あの台所のシンクですね、キッチン・シンク派と呼ばれる人たちが主流でした。戦後の辛い生活、それに真面目に向き合ってシリアスに人生を考えるみたいな、そういう文学が主流だったんですよ。 そこへイアン・フレミングが、軽い、男の夢をガンガン詰めこんでいったような、ジェームズ・ボンドの冒険譚をもちこんだわけです。なので当然、主流の文壇からは貶される。例えば、フレミングの書くような物語は、人生の不可思議な謎を解き明かそうとするものではないと批判されるんですけれども、彼にとっては逆にそれが褒め言葉じゃないですか。 精神主義とか、真面目さを大事にするという、そういう重たい態度より

も優位に立つために、あえて徹底的に表層的なことにこだわっていく。ワインの名前とか、スーツの名前とか、葉巻の名前とか、ブランド名ばかりを書き尽くしたようなテキスト。出てくる舞台も風光明美な異国で、美女に出会えば必ず一夜の情事を持つみたいな、そういう男の夢を詰めたという、そこが当時の精神主義、人生の深淵主義に対するアンチ、抵抗だったという意味では、ダンディズムですね。

◇**金井：**
その後、007は60年代から映画化されて、それから60年にわたって現代に引き継がれているんですが、その中で、アンチ主流派みたいなダンディズムは貫かれてきたという風に見ますか？　それとも、ちょっとずつ変わっていったのでしょうか？

◆**中野：**
今はむしろ、世の中全体が物質主義的なので、男の夢の主流派になってませんか。どちらかというと物質主義のお手本というか男の持ち物のカタログ的な側面まで有してきて、それがダンディズムなんだという錯覚を与えている一面もありますね。

◇**金井：**
ダンディズムという007シリーズを形成する重要な要素の一つみたいなところをお伺いしてきましたが、それと相反するように、もう一つの要素としてボンドウーマンという存在があると思います。 原作の第一作目で出てくるボンドウーマンが、ヴェスパー・リンド。映画『カジノ・ロワイヤル』ではエヴァ・グリーンが演じていたキャラクターです。ものすごく可憐な女性で、最後にボンドを裏切ってしまう。「The bitch is dead」という、よくこんな言葉が今の映画にも使えたなって思うぐらい象徴的なセリフがありますが、そこからボンドウーマンはこの60年でどういう変化をとげてきたと思いますか？

◆**中野：**
「カジノ・ロワイヤル」の「Bitch」は比較的特殊ですね。その後の 60 年代、70 年代のボンドウーマンは、敵のスパイなのにボンドの魅力にほだされて、結局ボンドの味方になっちゃうみたいな女性が出てくるじゃないですか。名前もメアリー・グッドナイトとか、プッシー・ガロアとか、なんという名前をつけるんだという・・・そういうわかりやすい役割の女性が出てきたのが60年代、70年代ぐらいですね。それから80年代にようやく知性が加わるんです。キャロル・ブーケ（『ユア・アイズ・オンリー』メリナ役）あたりでようやく知性が加わって、90年代になるとサディスティックなボンドウーマンも出てくる。

◇**金井：**
僕はティモシー・ダルトンのボンドがすごい好きで、何が好きなのかなって思った時に、ボンドウーマンの存在があるなと。『リビング・デイライツ』の時にマリアム・ダボが演じたボンドウーマンってショートカットなんですよね。それからティモシー・ダルトン以降って結構髪の短いボンドウーマンが多いなっていう印象があったりして、活発だったり、女性性みたいなものが変わってきたのかなと思ったりするんですけど、髪型や衣装の変遷につい

てはどうでしょうか？

◆中野：

髪型が最短になるのは 1985 年の『美しき獲物たち』のグレース・ジョーンズでしょうか。007 シリーズでは、その時代その時代に一番力のあるデザイナーが衣装に関わっていますが、この時のジョーンズの衣装はアズディン・アライアがデザインしています。アライアのピンクのピタピタのドレスに、フードがついている。非常にアイコニックな作品になりました。ダニエル・クレイグ時代の 007 になると、グローバルブランドの参入が増えてくるせいか、ファッションシューティングみたいなシーンも出てきます。たとえば『慰めの報酬』でダニエル・クレイグはトム・フォードを着ていて、ボンドウーマンのオルガ・キュリレンコはプラダのリトルブラックドレスを着て泥だらけの靴を持っているんですが、その靴が「ジーナ」というブランドなんです。イタリアの女優、ジーナ・ロロブリジーダにはいてほしい靴ということで、ジーナと名付けられたらしいんですけども。裸足で泥だらけになりながらも、プラダとトム・フォードを着た二人が歩いているシーンは高級ファッション誌のグラビアフォトみたいに見えなくもありません。

◇金井：

ポスターにもなっていて、すごく象徴的ですね。

◆中野：

そうですね。その時代に本当に力のあるデザイナーが、ボンドウーマンに関わってきたという、そこは変わらないですが、役割としては広がっていますよね。グレース・ジョーンズも最強の殺し屋で、女性性云々が問題にならない感じはすでにありましたが、クレイグ時代に入って M という上司を女性のジュディ・デンチが演じたり、一夜の情事を持つ女性に 50 代のモニカ・ベルッチが出てきたり、時代に応じてどんどん女性の役割も多様になって、年齢も幅広くなっているっていうことはあると思います。

◇金井：

女性の描かれ方も変わってきて、社会情勢もどんどん変化を遂げていますね。『007 は二度死ぬ』や『ムーンレイカー』では、SF チックな秘密基地が大きく描かれると思ったら、『リビング・デイライツ』にはムジャーヒディーンが出てきたり、『消されたライセンス』では南米の麻薬王が相手になったり。ブロスナン・ボンドになると、もう冷戦が崩壊してしまって敵がいない。そうすると今度はメディア王が敵になるみたいな時代の変化があると思うんですけれども、このあたりは中野さん、どういう風にご覧になってましたか？

◆中野：

やはり、その時代その時代に最もホットな、ニュース価値のある悪役っていうのが出てきますよね。一方で、普遍的な悪を司る組織としてスペクターがあって、ブロフェルドがボスとして出てくる。ブロフェルドは 7 人の俳優が演じてるんですけど、いつも白いペルシャ猫を撫でている人ですね。そのスペクターという組織名は頭文字でできています。皆さん、何の頭文字かご存知ですか？スペクター（SPECTRE）**SP**ecial

Executive for Counter-intelligence, Terrorism, Revenge and Extortion。

◇金井：
すごい名前ですよね。

◆中野：
これはどんな特別機関なのかというと、まずカウンターインテリジェンスはアンチ諜報、アンチスパイですね。そして、テロをすること、リベンジをすること、恐喝をすること。これをする組織のボスとして度々出てきて、普遍的な悪として描かれてるわけです。ただ 21 世紀になってくると、悪と善の境目がちょっとわかんなくなってきて、だんだん悪役が人間臭くなってくるんですよね。その 1 番人間臭い悪役の 1 人が『スカイフォール』のシルヴァです。シルヴァは多分、007 シリーズの悪役の中でも 1 番洗練されてますね。闇に落ちたボンドっていうような感じで。着ているのも、サヴィル・ロウのトム・スウィーニーのジャケットなんです。トム・スウィーニーはイギリスのブランドなんですが、ちょっとイタリアっぽい柔らかさがあるんですね。これがすごく、ハビエル・バルデムに似合ってるので、皆さんぜひファッションチェックをしてみてください。
ボンドウーマンのセヴリンがカジノで着ている衣装は、透明な袖、トランスペアレントの袖なんですけど、ちょっとタトゥー効果のあるデザインです。全体的にクリスタルがキラキラと何万ピースも縫い付けられていて、ボディの部分はしっかり体にタイトにくっついてるんですが、それは着替えるたびに縫いつけられていたそうです。
なので、非常に手間がかかってる衣装なんですね。出演シーンは少ないんですけども、ボンドウーマンや悪役に使われている、その衣装にかけるエネルギーと時間とお金、これも見どころです。

◇金井：
以前、中野さんにお聞きしてなるほどなと思ったのが、ボンドのマティーニのレシピ、それが社会情勢を反映しているというお話なんですが。

◆中野：
「Shaken, not stirred」（ステアではなくシェイクして）って、皆さんご存知だと思うんですが、そのレシピは元々原作に書いてあるんです。イギリス産のゴードンのジン、ロシアのウォッカ、フランス産のキナ・リレのベルモット、そしてアメリカ産のレモン、この 4 つの素材をシェイクするんですね。それはどういう意味かというと、世界平和への願いなんですよ。 あの原作が書かれた当時にあまり良い関係ではなかった国々をシェイクして、世界平和の願いをこめて飲もうっていう、そんなカクテルだったんですね。

◇金井：
いまだにバーに行くと、ちょっと頼みたくなってしまうという。でもあれ意外と強いんですよね（笑）『慰めの報酬』でクレイグ・ボンドが 6 杯飲んだというセリフがありますが、知り合いのバーテンダーが昔、同じ杯数を飲んだらしいんですけど、バーの中ではまっすぐ立てたのに、帰り道は歩けなくなったと言ってました。

◆中野：
後からきますよね、あれはね。

◇金井：
やっぱり、そういう強いお酒を飲めるっていうのも、ボンドの男らしい、すごくマニッシュな魅力なのかなと思います。

◆中野：
ヴェスパー・マティーを飲んだ時は、ちゃんと決め台詞を言わなきゃいけないですね。「一度味を知ると他のものは飲めない」。ボンドがこのカクテルを「ヴェスパーと呼ぼう」と言ったらヴェスパーが「後味が苦いから？」と返してくるんですが、それに対してボンドが決め台詞を言うんですね。「一度味を知ると他のものが飲めなくなるから」。照れずに決めたいセリフです(笑)

◇金井：
皆さん、ぜひ映画をご覧になった後にバーで「一度味を知ると他のものは飲めない」とおっしゃっていただきたいです。ところで『スカイフォール』の一番印象的なところを教えてください。

◆中野：
一つに絞れないほどたくさんありますが、やっぱりアデルの主題歌が切なくて素晴らしいと思います。

◇金井：
もう 11 年前っていうのは全然信じられないと思いながら、ダニエル・クレイグがこの時 40 代後半、そこから『スペクター』があって『ノー・タイム・トゥ・ダイ』に繋がっていくわけなんですけれども、その間のファッションだったり、彼の向き合い方の変化みたいなことを感じられたことはありますか？

◆中野：
インタビューされるたびに「もうこれで十分、もうやり尽くした」って必ず言ってますね。自分の限界までやって、もうダメっていうの、多分本当に思ってたんですね。それが 10 年以上繰り返されたという、なかなか多くの人が経験できる試練ではありませんね。

◇金井：
僕、最初にこの映画を観た時に、髪型が変わったなと思って。ベリーショートになってるんですよね。他の作品だともう少し長めにセットしてるんですけど、ショーン・コネリーに近づけてるのかなと思ったら、ショーン・コネリーも結構オールバックで長めなんですよね。あれはその頃の男性の髪型の流行りだったのか、いまだにちょっと謎なんですが、あれはどうしてだと思いますか？

◆中野：

やっぱりアクションシーンが多いからということでしょうか。髪にいちいち手をやるっていうのは、なかなか恥ずかしいことです（笑）よくアクションシーンのピリオドのようにカフスを直しますね。一つのアクションが終わったら、必ずカフスを直して次に行くっていう、あの仕草はとてもボンドらしくていいと思います。

◇金井：

なんか僕、学生の頃にその真似をして、ずっとカフスをいじってて、逆にかっこ悪い・・・

◆中野：

自意識過剰な人になっちゃう（笑）カフスって多分そのためにありますね。男の人がちょっと間を持たせる仕草って極めて少ないんですけれども、その中の一つが、カフスを直す、でしょうかね。

◇金井：

襟を正すならぬ、おしゃれを正します。中野さん、本日はどうもありがとうございました。

◆中野：

ありがとうございました。

◆2023 年 11 月 22 日（水）19:00

◆新宿ピカデリー

◆テキスト構成：@007_4K_JP / TC エンタテインメント / スタジオ･ピリカ